

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城がつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげつた森の中に穴をほつて住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はだけへ入つて芋を

ほりちらしたり、菜種がらの、ほして
あるのへ火をつけたり、百姓家の裏手
につるしてあるとんがらしをむしり
とつて、いつたり、いろんなことをし
ました。

或秋のことでした。二、三日雨がふ
りつづいたその間、ごんは、外へも出
られなくて穴の中にしゃがんでいま
した。

雨があがると、ごんは、ほつとして
穴からはい出ました。空はからつと晴
れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひ
びいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ま

した。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしづくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにごつた水に横だおしになつて、もまれています。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないうに、そつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。

兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶつていました。はちまきをした顔の横つちょうに、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ

ろ、白いものがきらきら光っています。
それは、ふというなぎの腹や、大きな
きすの腹でした。兵十は、びくの中へ、
そのうなぎやきすを、ごみと一緒に
ぶちこみました。そして、また、袋の
口をしばって、水の中へ入れました。
兵十はそれから、びくをもつて川か
ら上りびくを土手においといて、何を
さがしにか、川の方へかけていきま
した。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよ
いと草の中からとび出して、びくのそ
ばへかけつけました。ちょいと、いた
ずらがしたくなつたのです。ごんはび

くの中の魚をつかみ出しては、はりき
り網のかかっているところより下手
の川の中を目がけて、ぽんぽんなげこ
みました。どの魚も、「どぼん」と音
を立てながら、にごつた水の中へもぐ
りこみました。

一ぱんしまいに、太いうなぎをつか
みにかかりましたが、何しろぬるぬる
とすべりぬけるので、手ではつかめま
せん。ごんはじれつたくなつて、頭を
びくの中にツッこんで、うなぎの頭を
口にくわえました。うなぎは、キュッ
と言つてごんの首へまきつけました。
そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりた
てました。ごんは、びっくりしてとび
あがりました。うなぎをふりすてに
げようとしましたが、うなぎは、ごん
の首にまきついたままはなれません。
ごんはそのまま横つとびにとび出し
て一しおけんめいに、にげていきました。
した。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふ
りかえつて見ましたが、兵十は追つか
けては来ませんでした。

ごんは、ほつとして、うなぎの頭を
かみくだき、やつとばずして穴のそと
の、草の葉の上にのせておきました。

十日ほどたつて、ごんが、弥助とい
うお百姓の家の裏を通りかかります
と、そこの、いちじくの木のかげで、
弥助の家内が、おはぐろをつけていま
した。鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通
ると、新兵衛の家内が髪をすいていま
した。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、
思いました。

「何だろう、秋祭かな。祭なら、太
鼓や笛の音がしそうなものだ。それに

第一、お宮にのぼりが立つはずだが
こんなことを考えながらやつて来
ますと、いつの間にか、表に赤い井戸
のある、兵十の家の前へ来ました。そ
の小さな、こわれかけた家の中には、
大勢の人があつまつていました。よそ
いきの着物を着て、腰に手拭をさげた
りした女たちが、表のかまどで火をた
いています。大きな鍋の中では、何か
ぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いま
した。

「兵十の家のだれが死んだんだろ
う」

お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地蔵さんのかげにかくれていました。いいお天氣で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようになります。さきづづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴つて来ました。葬式の出る合図です。やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやつて来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へはいって来ました。人々が通つたあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十
が、白いかみしもをつけて、位牌をさ
さげています。いつもは、赤いさつま
芋みたいな元気のいい顔が、きょうは
何だかしおれていきました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母
だ」

ごんはそう思いながら、頭をひつこ
めました。

その晩、ごんは、穴の中で考えまし
た。

「兵十のおつ母は、床についていて、
うなぎが食べたいと言つたにちがい
ない。それで兵十がはりきり網をもち

出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとつて来てしまつた。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよツ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

兵十が、赤い戸戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と二人きりで、
貧しいくらしをしていたもので、おつ
母が死んでしまつては、もう一人ぼつ
ちでした。

「おれと同じ一人ぼつちの兵十か」
こちらの物置の後から見ていたご
んは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向う
へいきかけますと、どこかで、いわし
を売る声がします。

「いわしのやすうりだアい。いきの
いいいわしだアい」

ごんは、その、いせいのいい声のす
る方へ走つていきました。と、弥助の

おかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。

いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向つてかけもどりました。途中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず
一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗をどつ
さりひろつて、それをかかえて、兵十
の家へいきました。裏口からのぞいて
見ますと、兵十は、午飯をたべかけて、
茶椀をもつたまま、ぼんやりと考え方
んでいました。へんなことには兵十の
頬ぺたに、かすり傷がついています。
どうしたんだろうと、ごんが思つてい
ますと、兵十がひとりごとをいいました。
た。

「たいだれが、いわしなんかをお

う。おかげでおれは、盗人と思われて、
いわし屋のやつに、ひどい目にあわさ
れた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまつたと思いまし
た。かわいそうに兵十は、いわし屋に
ぶんなぐられて、あんな傷までつけら
れたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物
置の方へまわってその入口に、栗をお
いてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、
栗をひろつては、兵十の家へもつて来
てやりました。そのつぎの日には、栗
ばかりでなく、まつだけも二、三ぼん

もつていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山やまのお城の下を通つてすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じつとしていました。話声はだんだん近くになりました。それは、兵十と加助というお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十が
いました。

「ああん?」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎ
なことがあるんだ」

「何が?」

「おつ母が死んでからは、だれだか
知らんが、おれに栗やまつだけなんか
を、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが?」

「それがわからんのだよ。おれの知
らんうちに、おいていくんだ」

ごんは、ふたりのあとをつけていき
ました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまつて歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。ごんはびくつとして、小さくなつてたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつさとあるきました。吉兵衛というお百姓の家ま到来ると、二人はそこへはいつていきました。

した。ポンポンポンポンと木魚の音が
しています。窓の障子にあかりがさし
ていて、大きな坊主頭がうつって動い
ていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思い
ながら井戸のそばにしゃがんでいま
した。しばらくすると、また三人ほど、
人がつれだつて吉兵衛の家へはいっ
ていきました。お経を読む声がきこえ
てきました。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井

戸のそばにしゃがんでいました。兵十
と加助は、また一しょにかえつていき
ます。ごんは、二人の話をきこうと思
つて、ついていきました。兵十の影法
師をふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い
出しました。

「さつきの話は、きっと、そりやあ、
神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、
加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずつと考えてい
たが、どうも、そりや、人間じやない、
神さまだ、神さまが、お前がたつた一

人になつたのをあわれに思わつしゃ
つて、いろんなものをめぐんで下さる
んだよ

「そ う か な あ」

「そ う だ と も。だ か ら、まい に ち 神
さま に お 礼 を 言 う が い い よ」

「う ん」

ごんは、へえ、こいつはつまらない
など思いました。おれが、栗や松だけ
を持つていつてやるのに、そのおれに
はお礼をいわないで、神さまにお礼を
いうんじやア、おれは、引き合わない
なあ。

そのあくる日もごんは、栗をもつて、
兵十の家へ出かけました。兵十は物置
で縄をなつていました。それでごんは
家の裏口から、こつそり中へはいりま
した。

そのとき兵十は、ふと顔をあげまし
た。と狐が家の申へはいつたではあり
ませんか。こないだうなぎをぬすみや
がつたあのごん狐めが、またいたずら
をしに來たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがつて、納屋にかけて

ある火縄銃をとつて、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよつて来ました。家の中を見ると、土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりして、ごんに目を落しました。

「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐつたりと目をつぶつたま

ま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。